ゆうあい通信　第409

2026年(R8) 4月10日

発行所　石井記念友愛園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025　E-mail yuuaisya@kijo.JP

13名の志の群れ

園長　児嶋　草次郎

今、１年の中で一番美しい季節と言ってよいでしょう。今年はどういうわけか、山桜とソメイヨシノが同時期に咲いています。山桜の幽玄（ゆうげん）さ、ソメイヨシノの艶（あで）やかさが同時に味わえるのだから、ぜいたくな一時です。第六感まで全開にして、この春の自然の大気を吸収したいものです。そして自分のエネルギーとしたい。

３月後半は忙しい時期ですが、私は楽しみにしている旅行があります。それは、高校生たちとの２泊３日の「高校生自覚旅行」です。高校生たちの都合に合わせますので、毎年、３月31日から４月２日にかけてとなってしまいます。年度変りの時に、組織のリーダーがいなくてよいかと批判をあびそうですが、もうこのやり方をずっと続けていますので、直接何かを言ってくる人はいません。

今年の目的地は、土佐の高知の坂本龍馬像の立っている桂浜です。３年に１度は行くようにしていますので、高校生は在園中に必ず一度訪れることになります。今年は、新高校生が４人、４人の職員も合わせて13名の旅となりました。「13名」と書いた所で、今年は不思議なめぐり合わせがあったことを、ここに書きとめておきます。私にとってはこの龍馬をたずねる旅もお導きだったのだと言いたくなるような”事件”です。昨年が石井記念友愛社創立80周年でその節目を記念して、静養館の西側の倉庫を改修し「友愛社資料室」としました。中味はこれからで、元福岡県立大学教授の田代英美氏、同大学所属の佐藤繁美氏に御指導いただきながら、まず年表作りを行っています。今年の石井十次セミナー（８月23日）頃までには、展示を完了したいと思っています。

そこで私は、昔の写真を漁っているのです。つい２週間ほど前、父児嶋虎一郎関係の写真の中から、今まで見たこともない１枚の写真が出て来ました。裏を見ると「昭和11年３月30日　土佐桂浜撮影」と父自身の字で記入されてあります。今からちょうど90年前、父が22歳の頃です。22歳と言えば東京大学で東洋史を学んでいる頃です。父を含めて13名の男たちが桂浜の荒い波の打ち寄せる岸壁にそれぞれのポーズで立ったり座ったりして一群を作っています。学生服を着ているのは父だけで、群れの一番奥に遠慮がちに立っています。他の12名は、それぞれネクタイと背広で正装しており、気概（きがい）も感じられます。大学教授たちなのか、大原孫三郎関係者なのか。

坂本龍馬の巨大な銅像が立ったのが昭和３年ですから、おそらくその銅像を仰ぎ見た後、「オレたちも、学者界のあるいは実業界の龍馬たらん！」というあふれんばかりの熱い思いで、この崖っぷちに立つたのでしょう。砕け散る大波に洗われそうな近さです。父もこの頃は歴史研究者としての人生を描いていたのではないでしょうか。その後、あの戦争がすべてを打ち砕き運命も変ってしまいました。

さて、今回の「高校生自覚旅行」の話です。２月の、鹿児島に西郷隆盛を訪ねる一泊旅行に引き続いて、なぜこのような研修旅行をするようになったのか。一言で言えば、子供たちのアイデンティティの確立のためです。

私はこの茶臼原という開拓地の中の施設で育ち、誇りとすべきものは何も持たずに、大都会の大学へ進学しました。団塊の世代が育った頃は、大人も子供も生きることに必死で、地域の歴史や文化に

ついて学ぶ余裕もありませんでした。高度経済成長期に入ると、若者の多くは都会へと流れていき、田舎に残った若者たちの心の中には劣等感しかありませんでした。

子供たちを指導する立場に立たされた時、少年時代の志教育の重要性に気付き今に至っているのです。

３月 31 日（火)、朝５時 26 分、いつものように貸切バスで出発。暗闇の中雨に打たれながらのスタートでしたが、高速を進むにつれて雨もあがり、西の山々は、真綿に包まれたように霧に覆われていました。大分県の臼杵港に着いた頃には、雲間から朝の太陽の光りがさしこみ、山々の山桜を照らし出していました。

前回の旅行の時と同じように、私は子供たちに、バスの中で次のように話をしておきました。今回は、まず先ほどの昭和 11 年３月 30 日の写真のコピーも配りました。

「13 人の人たちが写っています。今回の友愛園の自覚旅行も 13 人です。偶然の一致です。この中に私が知っている人が一人だけいます。一番奥の学生服の青年です。私のお父さんです。みんなは会ったことはないけど、戦後昭和 20 年に石井十次先生の児童救済事業を再開した人です。

これからみんなが見に行く龍馬像は昭和３年に建っていますので、おそらくこの人たちも見に行ったのだと思います。そして、龍馬気どりで崖っぷちの所へ行って、写真屋さんに写真を撮ってもらったのだと思います。この写真で分かることは、90 年前から坂本龍馬は日本人にとって英雄であったということ。今回、私たちも同じポーズで写真を撮りたいと思います。

龍馬は 1835 年生まれだから、石井十次先生より 30 年前に誕生しています。石井先生のお父さんの世代です。西欧列強がアジアにどんどん進出し植民地化を進めている中で、ペリーが来航したのが 1853 年です。日本中がハチの巣を突ついたような大騒ぎになりました。

龍馬の最大の功績と言われるのが、みんなも知っている薩長同盟です。他にも勝海舟を師として海軍塾をたちあげたり、亀山社中という会社を作ったり、横井小楠に学んで「船中八策」を作ったりしています。これが「大政奉還建白書」へ発展します。そして、33 歳の時に暗殺されています。

龍馬は特別の人間であったのか、そんなことはない。小さい時は泣き虫で、11 歳頃まで寝小便たれだったそうです。お母さんも 12 歳の頃亡くなっています。そのか弱き少年を厳しく鍛えたのが乙女（おとめ）という男まさりのお姉さんだったそうです。お姉さんが剣術も教えています。

能力・資質から言えば、ここにいるみんなとそうかわらないと思います。なぜそんな少年が日本を救う少年になり得たのか。

今から話す３点を頭の中に入れて、それぞれの目で現地で検証してみてほしい。今、世界に目をやると、ロシアがウクライナに侵略し、アメリカとイスラエルがイランを一方的に爆撃したりしています。例えば、イスラエルとイランとの間に入って、互いに仲良くしようよと言える国がどこにあるのか。

龍馬は当時、犬猿の仲と言われた薩摩と長州の間に入って、日本の未来のために仲良くしようと呼びかけている。日本国内で戦争し合っていたら、そのスキをついて、外国の餌食となってしまうという危機感を持っていたから、命がけでアタックしていったわけです。西郷隆盛から信用されるためにどうしたらよいのかと、色々考えをめぐらしたと思う。私の考える３点です。

①自分を日本を、鳥の目的に高みから見つめる視点を持つこと。今、自分が日本が、世界の中でどういう状況に置かれているのかを想像すること。石井十次先生もこれができました。

②いつもみんなに言うようにプラス思考。どんなことが起きようと、人から何を言われようと、未来を信じて行動すること。一つみんなに宿題を出します。一番最初に見つけた者には、ほうびをあげま

す。お姉さんの乙女さん宛の手紙だったと思うけど、『すずめ貝のように、ドロをかぶっても自分は前進する』というようなことを書いた手紙がどこかに展示してあります。３年前行った時は、セイナ君がすぐに発見してくれました。
③人生は出会いです。勝海舟と出会わなかったら、西郷隆盛と出会わなかったら、長州の有力者たちと出会わなかったら、こんな大きな仕事はできていない。龍馬はこういう人たちと出会うために、命がけで多くの旅をしている。

臼杵港でフェリーに乗りこんだのは８時 30 分頃。約２時間半の船の旅です。私は前日大阪へ日帰りしていましたので少々疲れも感じており、しばらく体を横たえました。今回持参した本は、「動的平衡ダイアローグ」（福岡伸一）。題を見ただけでは意味不明ですが、NHK テレビで「動的平衡」について説明しているのを見て興味を感じ、たまたま出会ったこの本を買い求めました。次のような説明です。

「私たちは、自分の表層、すなわち皮膚や爪や毛髪が絶えず新生しつつ古いものと置き換っていることを実感できる。しかし、置き換っているのは何も表層だけではないのである。体のありとあらゆる部位、それは臓器や組織だけだはなく、一見、固定的な構造に見える骨や歯ですらもその内部ではたえまのない分解と合成が繰返されている。」

「私たち生命体は、たまたまそこに密度が高まっている分子のゆるい『淀み』でしかない。しかも、それは高速で入れ替わっている。この流れ自体が『生きている』ということであり、常に分子を外部から与えないと、出ていく分子との収支が合わなくなる。それゆえに私たちは食べ続けなければならない。」

「生命とは動的平衡にある流れそのもののことである。」

私の能力の範囲でしか理解し得ませんが、これを坂本龍馬に重ねるとどう解釈できるのか。「動的平衡」とは、運命を変えるにおいて、最も都合のよい根拠となり得ます。半年、１年後、分子レベルでは我々はすっかり入れ替わっているとも書いてありました。つまり、１年前の自分は自分ではなく、記憶によってつなぎ止めているだけなのです。劣等感が強かったり、虐待を受けて他人への恨みや不信感が強かったりしても、それは思いであるから、どうにでも変えられるわけです。おそらく、石井十次もそうでしょうが、龍馬は、本能的にそのことを察知した人間なのだろうと思います。過去にこだわらず、だから、自分の足を引っ張るものはなく、どんどん未来へ挑戦していけるのだと思います。

11 時すぎに四国八幡浜に上陸。ソメイヨシノが満開でした。山桜も咲き花桃も咲き、大自然の躍動し始めた四国の大地を見渡しながら、ひたすら松山道を北上し、途中川之江から高知自動車道に入って、山を越えました。高知のインターを出たのは、２時 40 分頃。ここでもう一つ、子供たちに話しておきました。
④「人を相手にせず、天を相手にせよ」と言ったのは西郷隆盛だったと思うけど、西郷さんに信用されるためにはどんな人間だったらよいのだろう。龍馬の一般的なイメージとしては、髪の毛ボサボサ、服はヨレヨレで、論語の言葉を借りるならば「巧言令色、鮮（すく）なし仁」のように、礼儀も知らず口先だけの人間のような印象を持つ。しかしこれは、マスコミ等によって作られた虚像だろうと思う。ある本（「坂本龍馬とその時代」佐々木真）に次のように書いてあった。

「本物の龍馬はもの静かで上品な、話し方も明るくさわやかな印象だった」。「全身から誠実さが感じ取れた」。こういうところも頭に入れて記念館を見学してほしい。

いよいよ「高知県立坂本龍馬記念館」を見学です。私たちはもう何度も来ていますが、子供たちにとっては人生初めての見学であり、運命を変えるきっかけになるかもしれません。幸いに常設展示室

で男性の若い学芸員が説明をしてくださいました。鹿児島の時もそうでしたが、生の声で説明を聞いた方が、言葉は心に届きます。

若い優秀な学芸員は、最初に次のような話をされました。幕末のペリーの来航以降の社会は現状とよく似ている。大地震が度々起きている。外国人が出入りするようになり、コレラが日本に侵入し大流行した。物価も高騰した。安政の大獄を主導した井伊直弼（なおすけ）が暗殺されたが、日本の元首相も暗殺された。こんな話を初めにされると子供たちもその話に集中します。子供たちにとっては興味ある解説となったことでしょう。私は、あの「すずめ貝」の手紙を捜しましたが見つけることができませんでした。３年前の記憶とはアテにならないものです。痴呆も進化しているのか。学芸員の説明が終ると女児たちはさっさと次のコーナーへと行ってしまい、男児３名と捜しましたが結局見つからず、結局、学芸員に教えてもらうことになりました。「日本を今一度洗濯したい」という主旨の姉あての手紙の最後の部分にありました。３年前のセイナの第六感には恐れ入ります。私たちは、その後、桂浜の巨大な銅像も見に行きました。もちろん浜へ下りていき、あの 90 年前の写真を意識して、取ったであろうと思われる竜王岬をバックに 13 人並んでカメラに納めました。

この日の宿泊所は高知市内。住所は唐人町。高知城にも割合近く、私は次の日の朝、散策してみることにしました。

４月１日（水）、朝６時過ぎに宿を出て、外で掃除をしていた宿の人にお城の方角を聞き歩き始めます。宿は川べりに建っていて、道路添いのソメイヨシノノは満開。街路樹などでも、枯れたまま放置しているところをけっこう見ますが、ここは、補植がちゃんとされてあり、行政の心配りを感じ取ることができて心地よいものでした。これぞ植物との共生です。天神橋のところから右折して、街の中へと入っていきます。板垣退助、後藤象二郎誕生地とか、旧山内家下屋敷長屋などと書かれた案内が立っています。目の前を突然赤い路面電車が通り過ぎびっくり。追手門のところで引き返しましたが、帰りは、アーケード街も少し歩いてみました。あの桂浜で見た太平洋の荒波と、静謐（せいひつ）とが同居している町というのが印象として残りました。

この日は、朝食後まず市内上町「龍馬の生まれたまち記念館」を見学。私は、車の中で、「寝小便たれの泣き虫」が、どう劣等感を克服していったのかを想像しながら見学してほしいとあらかじめ話しておきました。私にとっては何度目かの見学ですが、子供たちと同じように新たな好奇心でもって見て回りました。そして次のような説明を発見しました。

14 歳で道場に通い始めました。小さい頃は体が弱く、劣等感を持っていた龍馬も、次第に心身ともに強くたくましい青年に成長していった。

鹿児島の薩摩の郷中教育で言えば、“山坂達者”でしょう。やはり、子供たちにとって鍛錬錬磨は必要なのです。

なんだか押しつけがましい龍馬を学ぶ旅ですが、これだけおせっかいをしても、子供たちの受け取りは様々です。帰ってから各感想文を読みながら、私たちのできることは、チャンスを与えることなのだと、改めて実感することになります。

この後、私たちは、新居浜の別子銅山記念館へ行き見学し、今治市の村上海賊ミュージアムへも行きました。

別子銅山記念館で何を学ぶのか。以前通信にも書かせていただきましたが、私たちは、鉱山自体に興味を持っているわけではありません。高鍋出身で石井十次より４歳年上、住友総理事となった鈴木馬左也氏が、この鉱山の支配人となり、煙害問題等による地域との軋轢（あつれき）を解決へと導いた歴史的事実を確認するために立ち寄ることにしたのです。大企業の裏の歴史です。鈴木馬左也氏も

人々の和・輪を作ろうとする明倫堂の精神の体現者と言ってもよいでしょう。石井十次も資金的な支援を受けています。

村上海賊についても、石井十次とは関係がありません。村上海賊が暴れ回った瀬戸内海のリスクについて理解するためです。岡山孤児院の子供たちを九州宮崎へ輸送する手段は、最初の頃は小船でした。何日もかけて 400Kの海上を高鍋の港まで船旅をしたわけです。それがいかに危険の多い移住であったかを、子供たちのレベルで察しておく必要があります。高速道路から見下す瀬戸内海は、眠ったように静かですが、その下では刻々と潮流が変り、海賊の手を借りないと安全な運航ができないという面が江戸時代にはあったわけです。

この日は、伊予市の国民宿舎のようなところに泊まりました。工業団地の一角にあり、朝外に出てみると、回りは田園地帯でした。

４月２日（木）は、ひたすら宮崎へ向かって走る一日となりますが、今回は、愛媛県の城下町大洲（おおず）に寄ってみました。2020 年に日本初の城泊事業「大洲キャッスルステイ」がスタートしたとかテレビ等で紹介され、興味を持ったのです。高鍋の「友愛の森」事業の発展にとって、ヒントになるものが何かないか、そんな思いで、子供たちと一緒に町を散策しました。「ポコペン横丁」などの取り組みは、取り入れることができそうに思いました。

帰園して休む暇もなくこの通信を書き始めています。子供たちが、自分の人生に重ねながら、龍馬をとらえてくれたらと願っています。